

氏名	梶川 拓馬 (かじかわ たくま)
学位の種類	博士(看護学)
学位授与番号	甲博看第12号
学位授与年月日	令和5年3月8日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題名	患者の語りから得られた統合失調症患者が地域で生活を続けるために抗精神病薬を服薬する在り方に関する研究 (A Study on Taking Antipsychotic Medication for Patients with Schizophrenia to Continue Living in the Community - Through Patient Narratives-)
論文審査委員	(主) 教授 竹村 淳子 教授 小林 道太郎 教授 荒木 孝治

学位論文内容の要旨

《緒言》

統合失調症患者にとって抗精神病薬の服薬を継続することは、少なくとも陽性症状の出現や軽減には効果があり、症状の再燃を予防しながら地域での生活を安心して営むためには大切なことだと考える。しかし、必ずしも抗精神病薬を受容しているとは限らない状況もあり、統合失調症患者が抗精神病薬を服薬して地域で生活を続けることは容易なことではない。統合失調症患者にとって「抗精神病薬を服薬する」とはどういうことなのかについては詳しくは分かっておらず、これまで地域で生活する統合失調症患者を対象として抗精神病薬を服薬することについて直接話を聴いて、その結果を元に看護に役立てる研究は見当たらない。そのため、「抗精神病薬を服薬する」という体験が、その人自身の生活の中でどのような意味を持っているのかについて明らかにすることによって、統合失調症患者が抗精神病薬の服薬を継続しながら地域での生活を続けられるような支援のあり方を検討するための手掛かりになるのではないかと考えた。

《目的》

本研究は、統合失調症患者が地域で生活を続けるために抗精神病薬を服薬する在り方について患者の語りを手掛かりとして明らかにすることを目的とした。

《方法》

第一部では、地域で生活する統合失調症患者自身は抗精神病薬の服薬について、これまで、どのようなことを語っているのかを明らかにするために国外文献10件を対象として分析した。

第二研究では、精神科病院へ通院しながら地域で生活する統合失調症患者に対して実際にインタビューを実施し、分析及び考察を行った。本研究は Giorgi の現象学的心理学の方法を参考にした。

第三部では、文献による第一研究の研究結果と実際のインタビュー調査による第二研究の研究結果を比較して総合的考察を行った。

《結果》

第一部では、国外の地域で生活する統合失調症患者が抗精神病薬の服薬について語る内容は以下の3つに整理できた。服薬を中断したことについて語られていた内容(以下、語りとする)には、副作用で自分らしさが失われた、病気が治ったと思った、薬の効果が期待できないことがあった。服薬を再開したことについての語りには、再入院をきっかけにして服薬が必要に気づくことがあった。服薬を継続していることについての語りには、一緒に住んでいる人に迷惑をかけないこと、励ましてくれる支援者がいること、服薬を生活習慣の中に取り入れること、薬を役立つものとして考えなおすことがあった。

第二部では、日本の地域で生活する統合失調症患者が、抗精神病薬を服薬することについての語りを分析した結果をそれぞれの対象者ごとの本質的構造として読み取ると下記のようなことが分かった。①薬は出来るだけ飲みたくないと思っている一方で、自分のことを心配してくれる人々や身近で頼りになる人もいて、どうにか生活して薬を飲んでいる。②飲んでいる薬の種類は分からないが、歩くことが辛くなり、足を気遣い見守ってくれる他者や世話をしてくれる気心の知れた他者が居て、生きていくために薬を飲んでいる。③薬の効果を感じないものもあるが、かつて必死に薬を勧めてくれた信用して良いと思える他者に出会っていた。忘れずに薬を飲むことに注意深くなり始めた。④薬は必要ないと思っているが、人々とは交流して過ごしている。あるがままに認めてくれる人がいて、医師が処方する薬を飲み生活している。⑤薬の効果に半信半疑だったが、信頼できる人が押しつけない形で薬の飲み方を考えてくれ、薬を飲んで良いかもしれないと思うようになった。

そして、上記の5つの本質的構造に共通するものとして「患者は他者の重要性に気づき、他者に身を委ねることや他者の意見に任せることもある中で、初めに抱いていた抗精神病薬に対する否定的な思いに折り合いをつけ抗精神病薬の服薬を続ける」という一般的構造を読み取った。

第三部では、文献による第一研究の研究結果と実際のインタビュー調査による第二研究の研究結果を比較した。第一研究で整理した3つの群の語りの内容から、患者がこれまでの体験を振り返ることができることが服薬を続けていく鍵であると仮説を立てた。このことを第二研究の結果に照らしてみると、インタビューを行った対象者の中には自身の症状に対する振り返りが出来ていない人や薬の効果を期待していない人もいて、第一研究の結果からすると服薬を中断しても不思議ではないと考えられた。しかし実際は服薬を維持出来ていた。これは地域で患者と関わりのある人達との対人関係のバランスが維持されることで服薬の継続が支えられており、このバランスが崩れると服薬を継続出来ない状

態に陥る可能性があることが示唆された。

そこで改めて、「服薬を継続した方が良いとする医療者の見方」をもう一度脇において、第二研究の原資料に立ち返り、対象者はどのような在り方をしているかを見直した。その結果、患者は地域で生活しながら、以前のようにはならないようにどこかで推し量りながら、服薬をなんとか続け、地域での生活を成り立たせていることが分かった。これは対象者の持つ力と考えられた。

《結論》

現在、日本の精神科病院の入院者数は2017年時点において30.2万人で、2002年年度と比較して約4万人減少し、それに呼応して退院して地域で生活する対象者は増加している。今回の研究を通して知り得た、地域で生活する統合失調症患者が服薬を中断する可能性を孕んでいることや、一方で自ら服薬をしていく力もあることを踏まえて、対象者に即してより適切な看護師としての支援ができる方法の開発に励んでいきたい。

論文審査結果の要旨

本研究は、統合失調症患者が地域で生活続けるために抗精神病薬を服薬する在り方について明らかにしたものである。

第一部の研究は、地域で生活する統合失調症患者の抗精神病薬の服薬についての語りを、国外文献10件を対象に文献研究を行った。その結果、服薬の中断に関しては、副作用で自分らしさが失われた、病気が治ったと思った、薬の効果が期待できなかったことがあり、服薬の再開には再入院をきっかけにした服薬の必要性への気づきがあり、服薬を継続していることについては、一緒に住んでいる人に迷惑をかけないこと、励ましてくれる支援者がいること、服薬を生活習慣の中に取り入れること、薬を役立つものとして考えなおすということが明らかとなった。

第二部の研究は、地域で生活する統合失調症患者5名を対象として抗精神病薬を服薬することについてインタビューし、Giorgiの現象学的心理学の方法を参考に分析された。その結果、①薬は出来るだけ飲みたくないと思っている一方で、自分のことを心配してくれる人々や身近で頼りになる人もいて、どうにか生活して薬を飲んでいる。②飲んでいる薬の種類は分からないが、歩くことが辛くなり、足を気遣い見守ってくれる他者や世話をしてくれる気心の知れた他者が居て、生きていくために薬を飲んでいる。③薬の効果を感じないものもあるが、かつて必死に薬を勧めてくれた信用して良いと思える他者に出会っていた。忘れずに薬を飲むことに注意深くなり始めた。④薬は必要ないと思っているが、人々とは交流して過ごしている。あるがままに認めてくれる人がいて、医師が処方する薬を飲み生活している。⑤薬の効果に半信半疑だったが、信頼できる人が押しつけない形で薬の飲み方を考えてくれ、薬を飲んでも良いかもしれないと思うようになった。ということが明らかとなった。

第三部では、第一・第二研究の総合考察として、服薬を中断してもおかしくない患者の服薬継続には、患者と関わりのある人達との対人関係のバランスの維持が示唆されていた。この研究からは統合失調症患者の視点から服薬をする意味について問う視点が独創的であり、審査における研究の意義に関して明解に回答されていた。以上により、本論文は本学大学院学則第13条第3項に定めるところの博士（看護学）の学位を授与するに値するものと認める。

（主論文公表誌）

Health, 15(1), 72-91, 2023.